

# スポーツの力

～する・みる・ささえる～

## 伊賀市スポーツ少年団について

こどものころに同年代の仲間と一緒にスポーツをしたことはありますか。時には笑い合い、時にはケンカをする。同じ目標に向かって努力し切磋琢磨した経験や、その時できた仲間との絆は、大人になり社会に出たときに貴重な支えとなってくれます。

伊賀市には伊賀市スポーツ少年団があり、青少年の健全育成を目的に子どもたちにスポーツをする機会や場所を提供しています。同年代の仲間と集まって一緒にスポーツをして、同じ夢に向かって努力する。そんな日々は子どもたちにとってかけがえのない思い出となっていくことでしょう。

さまざまなスポーツの少年団があり、日々の練習のほか、三重県や東海ブロックの大会もあります。伊賀市では、本部長杯交流大会として、野球、バ

レーボール、サッカーの大会を開催しています。他にも、スポーツ少年大会や交流会、駅伝大会もあり、普段は接することのない別の競技をしている子どもたちとも交流する機会があり、仲間の輪を広げることができます。



そんな伊賀市スポーツ少年団は、令和6年度で設立20周年を迎えました。これからも子どもたちがスポーツを通して学び、仲間との友情を育み健やかに成長できる場所として、活動が続いていくよう市も協力していきたいと思ひます。

【問い合わせ】 スポーツ振興課  
☎ 22-9635 FAX 22-9694  
✉ sports@city.iga.lg.jp

## 伊賀の歴史余話 39

### 本能寺の変と伊賀 伊賀衆の再蜂起

天正10（1582）年6月2日、天下統一を目前にしていた織田信長は、家臣である明智光秀の謀反によって京都の本能寺に斃れます。

この歴史的な事件の前年、伊賀国は信長の侵攻を受けていました。この「天正伊賀の乱」と呼ばれる戦いでは、織田軍に対して伊賀国各地で土豪を中心とした伊賀衆が抗戦しますが、あえなく敗退します。国土は灰塵に帰し、多くの悲劇的な伝承が現在に伝えられています。

そのような状況の伊賀国に舞い込んできたのが、本能寺の変の知らせでした。徹底的に殲滅されたはずの伊賀衆でしたが、これを好機とらえ再び蜂起します。

蜂起の鎮圧にあたった織田信雄の家臣、小川長保が残した覚書には、9月に宮田城（丸柱）、10月に鳥ヶ原城、11月には雨乞山城（下友田）で伊賀衆が籠城を始めたことあります。小川らは、次々と蜂起する伊賀衆の鎮圧に手を焼きます。

一方、『勢州軍記』などの軍記物は、伊賀における別の蜂起を伝えています。場所は一之宮の富坂に設けられた地形が険しく守りに有利な要害で、小泉伊豆ら近隣の土豪が立て



文化財課歴史資料係  
☎/FAX 41・2271

籠もったとあります。なかでも当時73歳の老将、森田浄雲は敵将を組み伏せるなど、その奮戦ぶりが事細かに紹介されています。

この一之宮における蜂起は鎮圧され、浄雲も討死を余儀なくされました。しかし、各所での伊賀衆の抵抗は、天正11年4月に賤ヶ岳の戦いで羽柴秀吉が柴田勝家を破り、次なる天下人への歩みを進めるまで続きました。

賤ヶ岳の戦いの翌年、伊賀国を平定した秀吉は、すぐさま鳥ヶ原城などの破壊を命じます。秀吉の脳裏に、天正伊賀の乱から驚異的な回復を見せた伊賀衆の姿が焼き付いていたのかもしれない。

▲昭和51（1976）年に発見された森田浄雲の墓石（寺田）

## 明日に向かって ～差別をなくしていくために～

人権について考えるコラムです。

### 「普通」ってなんだろう —企画振興部地域創生課—

#### ◆普通ってなに？

普段の生活の中で「普通はこうするよね」「普通だ」などといった言葉を聞くことがあります。私は、この「普通」という言葉に違和感を持つときがあります。

「普通」ってなんだ？

私もつい口にしてしまうときもありますが、そのときにはハッとして、「普通って何だろうね」と自分に問いかけ、時には相手とも共有して一緒に考えることもあります。

人はなぜ「普通」という表現を使うのでしょうか。そして私はなぜ「普通」という言葉を聞いたときに違和感を持ったのでしょうか。

#### ◆私の普通は、他人の普通ではない

「普通」とは、それぞれの人の中にある「モノサシ」で、その「モノサシ」を「普通」という言葉に置き換え、自分の考えを他人に強要してしまっているの

ではないかと思ひます。

自分の中の「モノサシ」はみんな違います。

何気なく使っている「普通」という言葉が、相手を不快にし、不安にし、時には傷つけてしまうことがあるということを知っていなければならないと思ひます。

#### ◆人権感覚を維持する

このように、普段の生活の中で人権を考える機会がありますが、私の記憶に残り、また大切にしている言葉があります。それは、「人権研修は自分自身の人権感覚を維持するためのものである」という言葉です。

人権意識や人権感覚は、継続した学びで維持できるものだと考えています。

これからも継続的に人権研修を受講し、学び、考え、人権感覚を維持できるよう研鑽を積んでいきたいと思ひます。

■ご意見などは人権政策課 ☎ 22-9683 FAX 22-9641 ✉ jinken-danjo@city.iga.lg.jp へ

## IGAMONO セレクション No.58

### 伊賀焼 炊飯土鍋「かまどさん」

火加減いらず、吹きこぼれなし。手間いらずでおいしいご飯が炊ける炊飯土鍋です。

直火部分は肉厚成形の仕上げにより熱をしっかりと蓄えてから穏やかに伝え、「始めチヨロチヨロ中パッパ……」という昔のかまど炊飯の秘訣を、火加減いらずで土鍋自身が自然に叶えます。二重ふたが圧力釜の機能を果たし、吹きこぼれも防ぎます。また、炊き上げ時間を1分前後延ばすと、香ばしいおこげができます。伊賀陶土の特長で多孔質な土鍋が、木のおひつと同じように呼吸をするため、ご飯がべとつかず、冷めてもおいしくお召し上がりいただけます。



2000年の発売以来110万台の販売実績  
2005年 グッドデザイン賞・中小企業庁長官特別賞受賞  
2008年 三重県の三重ブランドに認定



長谷製陶株式会社 代表取締役社長 長谷 康弘さん

伊賀焼 和陶器の製造販売。1832（天保3）年創業、伊賀焼の伝統と技術を今に継承しつつ、常に時代を見据えたモノづくりに専念しています。「作り手こそ、真の使い手であれ！」の考えのもと、「用・美・楽」をコンセプトに、使いやすく、美しく、楽しい陶製調理具を追求しています。伊賀本店と東京・恵比寿の直営店を拠点に伊賀焼の認知度向上

に努めており、食卓で土鍋を囲めば生まれる喜びや楽しさを伝え国内外の多くのお客様からご好評を得ています。また、毎年5月に開催している「窯出し市」では全国から多くのお客様（3日間で約3万人）にお越しいただくなど、地域の発展・ファンづくりに取り組んでいます。

【問い合わせ】 ☎ 0120-529-500

■伊賀ブランド推進協議会事務局（商工労働課） ☎ 22-9669 FAX 22-9695